

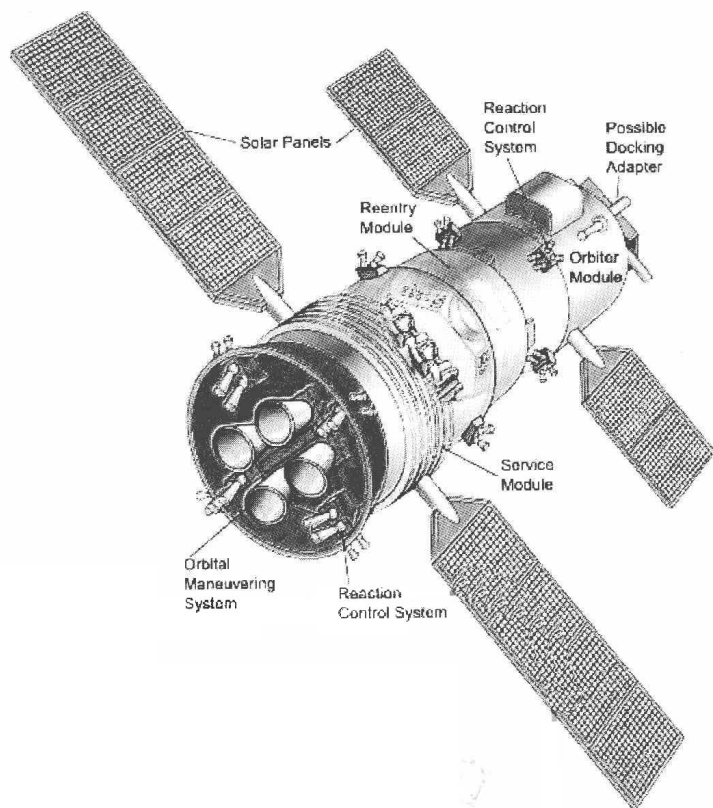


中国の 核・ミサイル・ 宇宙戦力

拓殖大学国際開発学部教授

茅原 郁生 編著

蒼蒼社



中国の 核・ミサイル・ 宇宙戦力

茅原郁生 編著

中国の核・ミサイル・宇宙戦力

定価／ 本体 4300 円＋税
発行日／ 2002 年 7 月 15 日

編著者／茅原郁生
発行人／中村公省

発行元／(株)蒼蒼社
TEL042 (721) 9285
FAX042 (721) 9286
郵便振込：00140-5-63055
e-mail sososha@s.email.ne.jp
URL <http://www.mmjp.or.jp/sososha>
郵便番号 194-0022 東京都町田市森野 2 丁目 26 番地 16

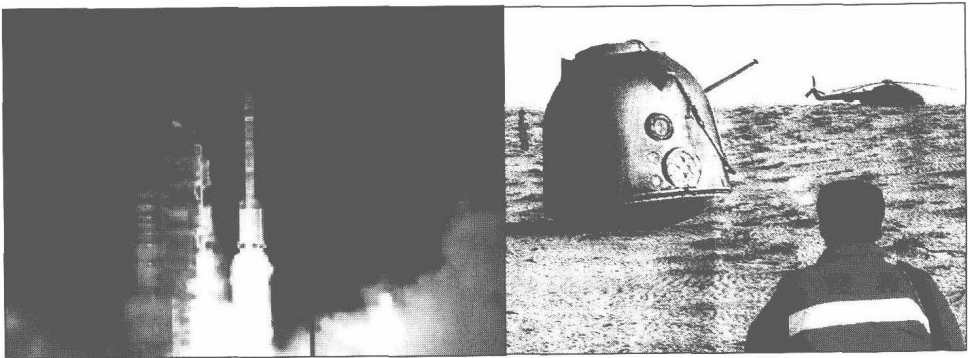
© KAYAHARA Ikuo, 2002
ISBN 4-88360-032-7 C3330

まえがき

中国は宇宙船「神舟3号」の打ち上げ・回収に成功した。「神舟3号」は2002年3月25日、酒泉衛星打ち上げセンターから打ち上げられ、108回地球を周回し、2002年4月1日に内モンゴル自治区に帰還・回収された。「神舟3号」は緊急脱出装置をはじめ有人飛行を想定した実機モデルでの成功であり、次は有人宇宙船の打ち上げ、と見られている。

経済の発展途上にある中国は、科学技術全般もなお発展の余地が大きい水準にとどまっているが、宇宙ロケットなどの限られた分野では世界一流のレベルにある。それは中国が宇宙開発だけでなく核・ミサイル戦力の強化に並々ならぬ努力を傾注してきた成果でもある。

宇宙開発に向けた中国の力の入れようは、そのまま中国の核・ミサイル・宇宙戦力強化の狙いにつながっている。中国はすでに核保有国であり、米国が進めようとしているミサイル防衛(MD)網構想に反発する一方で、自らは潜水艦からミサイル発射の実験をするなど自国の核・ミサイル戦力の強化を推進している。



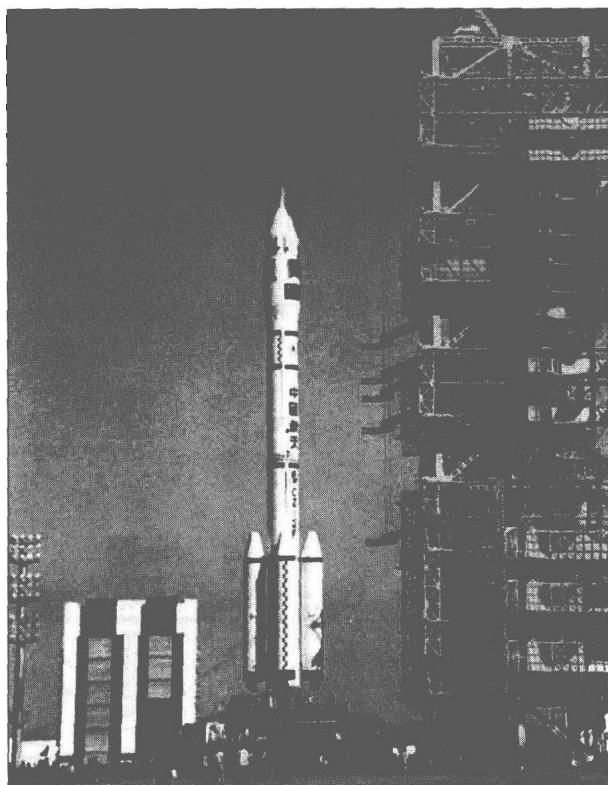
「神舟3号」の打上げ状況及び回収されたカプセル

- ◆中国は何故、核・ミサイル・宇宙戦力の開発・強化に熱心なのか？
- ◆大国指向を強める中国の核・ミサイル・宇宙戦力の目的は何か？
- ◆その実態と水準はどうか？ 将来の発展方向は？

このような問題意識のもとに本書は中国の核・ミサイル・宇宙戦力の実態と発展動向をまとめている。冷戦後、国際秩序の柱が大量破壊兵器の拡散防止に置かれ、核兵器拡散防止条約（NPT）が無期延期されると共にその不平等性を是正するための包括的核実験禁止条約（CTBT）が1997年に締結された。しかし一方で、米国では議会がこの批准を拒否するなどCTBTの実効性、さらにはNPTの形骸化などが懸念されている。中国もまたNPTが規制している核兵器のタテの拡散（強化、精密化）を進めているのではないかという疑念が抱かれている。加えて中国の軍事力近代化の背景と意図が不透明であることから、これまでも「中国脅威論」が浮上してきた経緯がある。

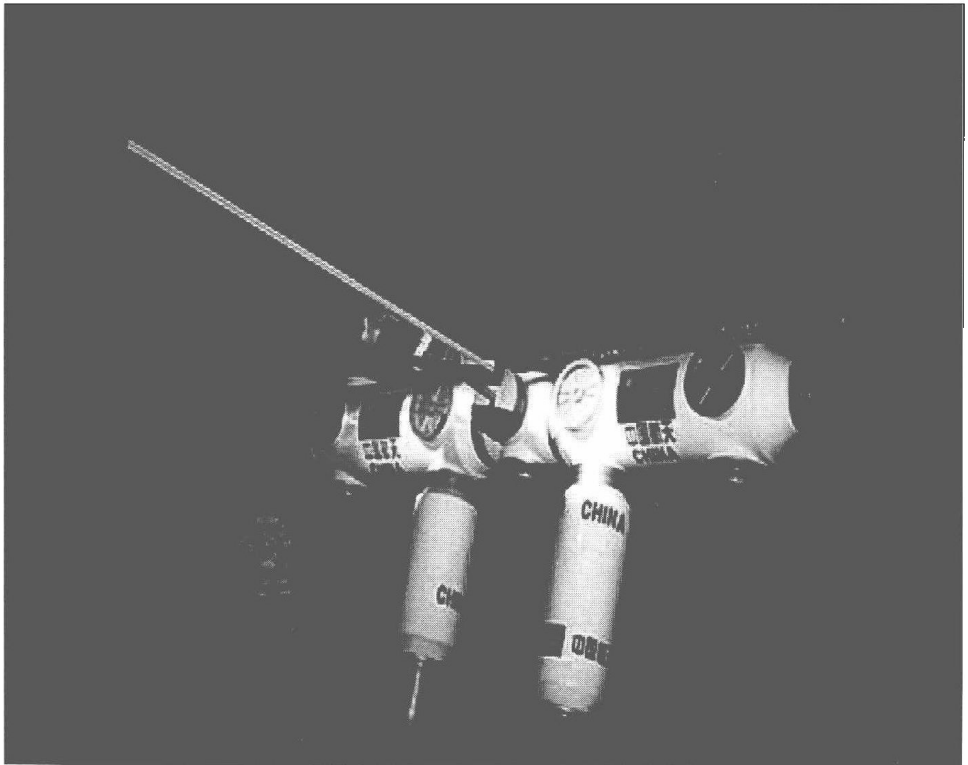
中国が核・ミサイル・宇宙開発を推進しているのは米国主導の国際秩序への対抗措置であり、またミサイル輸出など「テロ疑惑国家」に対する関わりが事実であるとすれば、まさに中国は「厄介な隣人」ということになる。実際、2002年5月に高まったインド、パキスタンの軍事的危機は改めて核戦争生起の危機感を覚えさせた。これに関連し米上院で再びこれまで印パの核ミサイルの開発・強化を支援してきた中露両国への非難が浮上している。このように21世紀もまた核・ミサイルの脅威から逃れることはない。言うまでもなく中国の核・ミサイル・宇宙戦力の問題は、アジア地域の安全保障の中で検討されるべきである。21世紀にはアジア地域の大国として日本と中国の関係が重要な課題となるが、それは両国の共存・共栄だけでなくアジア地域全体の平和と繁栄に繋がるものであるからである。

日本は核・ミサイル・宇宙戦力を重視する中国とどのように対面するのか？



「神舟3号」を打ち上げた長征型ロケット

日本としては中国との協調を追求すべきであるが、その基盤となる両国の信頼醸成がまず重要である。そのためには日中間の相互理解の深化が求められ、それには政治面・経済面の幅広い現状認識から社会・文化的な根底に関わる深い理解が必要である。同時に、厳しい国際関係の現実から安全保障の視点を抜きにした中国理解もありえない。とりわけ「中国脅威論」に直結する核・ミサイル戦力から宇宙開発までの中国の軍事能力の解明の必要性は高まっており、このテーマは決して一部の専門的な問題として限定されるべきではない。



中国の将来の宇宙ステーションの模型(ハノーヴァEXPO2000における展示)

©MarkWade(www.astronautix.com)

本書は、中国の軍事能力、特にその核・ミサイルから宇宙戦力までの実態の解明を狙いとしている。この分野は、中国にとって機密度の最も高い分野であるだけに公刊資料も少なく、どれだけ実態に迫り得るかという不安が残る。しかし、たとえ厚いベールに包まれ、不透明であるとしてもその実態に迫り、日中両国間の信頼醸成のために、それらの問題の不透明性や疑念を少しでも排除することが重要である。

その輪郭を描き出す困難な作業としては、中国の核・ミサイル・宇宙戦力に関連する国際政治・軍事研究者から開発現場の技術者までの専門家がそれぞれの知識とこれまでの研究成果を持ち寄って、総合的な検討をくり

返す方法をとった。そして、アジア地域の安全保障環境に大きな影響を及ぼす中国の核・ミサイル・宇宙戦力の客観的な状況を把握し、それに関連する国際法規や軍備管理から検討を加えて、わが国の対応のあり方を考察している。

本書を通じて主張したい趣旨と狙いは一貫しており、それは2年間に及ぶ18回の研究会を通じて相互に意見交換を重ね、大筋においてメンバーの合意が得られたものである。同時に13名のメンバーのそれぞれの専門分野ごとの主張もまた尊重されている。本書の記述の中で若干のニュアンスの違いや立論の構成上で重複した記述が見られることはあらかじめご了解いただき、全体として本書の主張をご理解いただければ幸いである。

なお、本書の主テーマは、中国の核・ミサイル・宇宙戦力の三分野にわたっているが、これらは相互に関連しあった一体的なものであり、論立てには若干の無理がある。各専門家の執筆による「章」立てを、読み易さの便宜上、第Ⅰ部から第Ⅳ部に区分したものであって、むしろ各章のテーマに盛られた内容を中心にお読みいただく方がいいたかもしれない。

最後になったが、本書は、笹川平和財団・笹川日中友好基金の出版助成を受けて刊行されたものであり、関係各位のご理解とご尽力に感謝の意を表したい。

平成14年6月23日

茅原郁生

Executive Summary

序章 今、なぜ中国の核・ミサイル・宇宙戦力なのか？

核・ミサイル・宇宙戦力への中国の対応や、これらをめぐる新しい戦略環境と国際的な軍備管理体制への影響などを見据えて、本テーマへの問題意識と研究に当たっての視角、その基本要件などを提示している。中国は宇宙船「神舟号」の打ち上げなどで輝かしい成果をあげ、核不拡散条約（NPT）に関しては核戦力の「タテの拡散」を続け、またミサイル技術管理体制（MTCR）には未加盟のままミサイル拡散を進めている。中国理解深化のため安全保障面から核・ミサイル・宇宙戦力の実態を解明する必要性がいまこそ高まっている。

（編著者：茅原郁生／拓殖大学国際開発学部教授担当）

第1部 中国の核・ミサイル・宇宙戦力をめぐる戦略環境

中国の核・ミサイルや宇宙軍事利用の問題を研究するに当たって、これらの基盤や背景となる軍事革命の趨勢、中国の国家像と国防政策、国防工業基盤など前提条件となる要因を解説している。

第1章 軍事における革命の進展と中国の対応

核・ミサイル・宇宙戦力と密接に関わる軍事における革命（RMA）の趨勢について、米国等の先進的な動向を解説し、中国の対応をまとめている。特に米国の陸・海・空軍で進められているRMA計画とジョイント・ヴィジョン2010/2020の現状及び世界各国のRMAへの取り組み状況を紹介するとともに、RMAが抱える問題点を明らかにしている。その中で先進的な軍事技術に限界のある中国のRMA化の対応動向を要約している。

（江畑謙介／軍事問題研究家担当）

第2章 中国の国家像と国防近代化政策

核・ミサイル・宇宙戦力を検討する条件として、中国の国家戦略と現実的課題を踏まえて、その将来像を描くとともに、安全保障観や軍事力の実

Executive Summary

態、国防近代化政策などについてまとめている。中国はどのような国家になるのか、21世紀の中国を中期展望する。また、「銃口から政権が生まれる」中国が軍事力を重視している実態を明らかにしている。さらに、中国が現に進めている国防近代化政策について、その目標と抱える現実的な制約要因などについて分析している。(茅原郁生担当)

第3章 中国の国防科学技術生産の基盤

核・ミサイル・宇宙戦力の技術開発や生産基盤となる中国の国防工業について、その発展の経緯や現状及びその水準などの実態についてまとめている。特に鄧小平主導による「経済建設優先の大局に従う」国防近代化政策を受けて進められる軍民転換の現況や、その下での核・ミサイル・宇宙部門の開発体制の技術的な評価とその将来展望を試みている。

(大西康雄／ジェトロ・アジア経済研究所主任研究員担当)

第II部 中国の核戦力と国際核軍備管理への対応

中国の核開発の動機と発展経緯、その核戦力の現状評価と今後の発展予測、基本となる核戦略と管理・運用に当たる第2砲兵部隊の実態、さらに国際的な核管理体制とそれに対する中国の対応などをまとめている。

第4章 中国の核開発と国際核管理の変遷

中国が建国間もない困難な時期に核開発に着手した動機とその核開発の経緯や背景を明らかにし、核開発が最優先されてきた状況をまとめている。特に今日、中国を大国たらしめている核・ミサイルの保有は、1950年代後半に「パンツをはかなくても核兵器を」の決意で毛沢東によって踏み切られた。文化大革命期間も特別に保護された核・ミサイル開発政策は鄧小平、江沢民によって継承され現在に至っている。

(飯塚央子／武蔵野短期大学非常勤講師担当)

第5章 中国の核戦力の現況と将来

核戦力強化の結果としての運搬手段も含めた核戦力の実態を評価するとともに、中国が強く反発する米国のミサイル防衛（MD）への対応などをまとめている。特に中国の核戦力の現況分析を踏まえて、米国などに対する抑止力となり得るかどうか、その実態解明とともに、第2撃力の残存性を追求する核戦力の近代化の動向とその将来展望にも言及している。

（間山克彦／防衛研究所第2研究部所員担当）

第6章 中国の核戦略と核ミサイル戦略部隊

中国の国防戦略と核戦略の意味合い、その発展方向などを分析し、核・ミサイルの管理・運用を担当する戦略部隊・第2砲兵について創設の経緯からその編成・装備など国防軍としての実態についてまとめている。特に中国の「最小限核抑止戦略」の成立要件を解明するとともに冷戦後の中国の核戦力の位置づけと新たな核戦略の発展方向を検討している。また第2砲兵の訓練状況などを現状解明し、その作戦能力の評価と将来の近代化の進展を予測している。

（茅原・間山担当）

第7章 中国の核軍備管理・軍縮政策

冷戦時代から進められてきた核不拡散条約（NPT）などの国際的な核軍備管理に関する諸条約から規制までを体系的に解説するとともに、これまでの中国の核管理枠組みや核軍縮への対応動向及びその影響等をまとめている。中国は核軍備管理に協力するのか、独自路線に固執するのかを問題意識に据えて、国際的な核管理や今日の焦点となっているMDへの中国の対応までを分析している。

（小川伸一／防衛研究所第1研究部主任研究官担当）

第Ⅲ部 中国のミサイル戦力とその管理

核運搬手段であるミサイルに関して、中国の開発・強化の動向とその戦

Executive Summary

力評価するとともに日米共同で研究を進めているミサイル防衛（MD）構想の実態及び中国の反応、さらには関連するミサイル輸出規制の国際的な管理体制などについてまとめている。

第8章 中国のミサイル戦力の現況と展望

中国の広範・多様なミサイルの開発の歴史と実態の解明及び将来の発展動向などをまとめている。特に中国のミサイル技術について、その発展経緯を踏まえて制御系統、推進系統、大気突入技術、さらに核弾頭の小型化、個別誘導複数目標弾道（MIRV）化など、今日の技術水準についての評価が分析されている。

（榑 純一／石川島播磨重工業㈱新機種プロジェクト部次長担当）

第9章 戦略ミサイル防衛（TMD）構想と中国の対応

戦略ミサイル防衛について、米国における開発経緯やこれまでの日本の弾道ミサイル防衛（BMD）構想を要約するとともに、日米共同による技術研究の実態とこれに反対する中国の動向についてまとめている。特に21世紀に新しく浮上してくる米国のTMD要撃システムについては陸上配備、海上配備に分けて技術的な分析している。

（布部 剛／石川島播磨重工業 ㈱防衛システム事業部技術課長担当）

第10章 ミサイル技術管理体制（MTCR）と米中関係

ミサイル及び関連技術の管理に関わる国際的な課題を整理して、MTCRへの中国の対応動向やパキスタンなどへの移転疑惑に関わる国際的な影響などについてまとめている。特に中国のミサイル関連の輸出の実態とその輸出管理規則や条令などの制定状況を踏まえて中国のMTCR加盟をめぐる問題の本質と米中間の確執について分析している。

（鈴木祐二／拓殖大学海外事情研究所教授担当）

第Ⅳ部 中国の宇宙戦力と国際的問題

Executive Summary

核・ミサイル戦力に関わる中国の宇宙開発の経緯と現状、宇宙船「神舟号」の開発を踏まえて、今後の発展方向、さらに宇宙空間の軍事利用としての中国エアロスペース・パワーの実態および宇宙開発に関する国際法からの規制と課題などをまとめている。

第11章 中国の宇宙開発戦略の現状と開発体制

宇宙の軍事活動と国際社会への影響などを踏まえ、中国の宇宙開発戦略と開発の経緯およびその開発体制の実態などをまとめている。特に中国の宇宙開発計画の実現に向けた国家を挙げた開発努力の現況とそれに関連する開発体制について機関別に組織、機能を体系化し、評価している。

(稗田浩雄／(財)未来工学研究所技術・国際関係研究センター長、盛光史郎／同研究所主任研究員担当)

第12章 中国のロケットを中心とした宇宙技術水準 と将来展望

中国の宇宙ロケット技術の全般的な評価を踏まえ、エンジン、制御、追跡・管制などの各系統から生産分野までの衛星技術の水準を分析し、その将来の発展方向をまとめている。特に中国の宇宙船「神舟号」について全般計画から、神舟1号の打ち上げ以降の発展の経緯と2003年とも言われる有人宇宙船の打ち上げ予測など、ホットな解説を盛り込んでいる。

(稗田・盛光担当)

第13章 中国のエアロスペース・パワーの現況と趨勢

エアロスペース・パワーの今日的な意義を整理するとともに中国のエアロスペース・パワー強化の動向およびその趨勢についてまとめている。特に中国における航空宇宙システムについて通信、偵察、気象、科学探査、有人宇宙船などの機能を個別に分析するとともにこれらが航空早期警戒システムなど軍事利用される可能性について分析している。

(新冶毅／元防衛大学校防衛学教授担当)

第14章 宇宙開発の国際法的な枠組み

国際宇宙法とは何かを踏まえ、宇宙条約にかかわる軍備管理の実態を分析するとともに国連における軍縮会議や宇宙貿易協定による軍備管理及びこれらへの中国の対応などをまとめている。特に軍事衛星の法的地位や日本の「平和利用政策」について解説し、中国の宇宙軍備競争への対応動向など、宇宙の軍備管理に関して具体的に検討されている。

(青木節子／慶応義塾大学総合政策学部助教授担当)

終章 核・ミサイル・宇宙戦力をめぐる新しい戦略環境 とわが国の対応

中国の核・ミサイル・宇宙戦力の発展成果を予測し、厳しさが増す戦略環境の中でわが国の対応のあり方を考察し、アジア地域の安全保障環境を踏まえた日本としての対応と担うべき役割についてまとめている。特にモスクワ条約など米露間の核軍縮の進展がある一方で、米国の「核戦略の見直し」や米中間のミサイル防衛（MD）をめぐる確執など、楽観を許さない戦略環境を踏まえて、日本の弾道ミサイル防衛（BMD）の開発推進と21世紀の国益をにらんだ宇宙開発への積極的な取り組みを提言している。

(茅原・榎・稗田担当)

付録 資料編

本文中に掲載・添付できなかった重要なデータや参考文献、資料などをまとめている。
(榎担当)

[目 次]

まえがき	1
エグゼクティブサマリー	6
キーワード一覧（１）略語	28
キーワード一覧（２）用語解説	32

序章 何故、今、中国の核・ミサイル・宇宙戦力なのか？ —中国の核・ミサイル・宇宙戦力への視角—茅原郁生	39
--	----

はじめに	41
------------	----

① 核・ミサイルをめぐる新しい戦略環境	43
（１）米国主導の新しい戦略環境の変化	43
（２）核兵器拡散防止条約体制のジレンマ	46
（３）挑戦を受けるミサイル関連技術移転規制体制	49
② 何故、今、中国の核・ミサイル・宇宙戦力が問題なのか？ ...	52
（１）中国の国際的な核管理への対応姿勢	52
（２）ミサイル防衛（MD）網開発への中国の反発	53
（３）中国の核・ミサイル・宇宙戦力をテーマとする必要性 ...	54
③ 中国核・ミサイル・宇宙戦力に関する問題意識とその視角 ...	56

第1章 軍事における革命の進展と中国の対応

-江畑謙介 61
- ① 軍事における革命（RMA）の発想 61
- ② 米陸軍のRMA化計画 63
- ③ 米陸・海・空軍のRMA化計画と
ジョイント・ヴィジョン 2010 / 2020 69
- ④ 米統合参謀本部のジョイント・ヴィジョン 2010 / 2020 ... 72
- ⑤ RMAの問題点 76
- ⑥ その他の国のRMA化 78
- ⑦ 中国軍のRMA化予測 79

第2章 中国の国家像と国防近代化政策...茅原郁生 91

はじめに 91

- ① 中国はどのような国家になるのか？
—中国が抱える課題と21世紀の中国像— 92
- （1）中国が追求する21世紀の国家戦略 93
- （2）中国という巨大国家が抱える課題 95
- （3）中期的に展望する中国像 99
- （4）新しい中国内外の情勢と核・ミサイル・宇宙戦力 ... 102

②	中国の安全保障観と軍事力の特性	104
	(1) 中国の国際情勢認識と安全保障環境	104
	(2) 中国の安全保障観と軍事力の特性	106
	(3) 解放軍の建軍の経緯と任務の拡大	106
③	中国の軍事組織と軍事力の実態	108
	(1) 中国の軍事組織と指揮系統	108
	(2) 中国の軍事力の現況	110
	(3) 軍事力の現状と国際比較	113
④	中国における国防近代化政策	114
	(1) 国防近代化の必要性と目標	114
	(2) 国防近代化の制約要因とその成果	116
	ア. 先進的な軍事技術の課題	116
	イ. 兵器製造基盤の課題	117
	ウ. 国防近代化資金の課題	118
	エ. 予想される国防近代化の成果	119
	おわりに	120

第3章 中国の国防科学技術生産の基盤…大西康雄 123

はじめに	123
------------	-----

①	国防工業体制の変遷	124
	(1) 草創期 (1949～59年)	124
	(2) 発展期 (1960～78年)	125
	(3) 改革期 (1979年以降)	126